

「川といきる」「村をひらく」「農をおこす」 ——岩見沢市北村発『北村の記憶』から見えてくる北海道

第1回 「川といきる」

ノンフィクションライター、「ほっかいどう学新聞」編集人

北室 かず子 (きたむろ かずこ)

1962年徳島県出身。筑波大学比較文化学類卒業後、婦人画報社(現ハースト婦人画報社)に入社し、女性月刊誌の編集に携わる。91年からJR北海道車内広報誌『THE JR Hokkaido』特集を30年にわたり企画・取材・執筆中。著書：『赤れんが庁舎物語』(北海道文化財保護協会)、『北の鞆ものがたり—いたがきの職人魂』(北海道新聞社)など。



住民のためのガイドツール『北村の記憶』

筆者は、ノンフィクションライターとして、道内各地を取材しさまざまな記事を執筆する立場で、認定NPO法人ほっかいどう学推進フォーラムの会報「ほっかいどう学新聞」の編集人を務め、「ほっかいどう学」について考えてまいりました。

昨年、岩見沢市北村の北村地域農泊推進協議会から、先史時代から現代に至る歴史をまとめた冊子『北村の記憶』が、村田文江氏(元北海道教育大学教授、岩見沢市文化財保護委員会委員)の監修で発行されました。

筆者はこの冊子の執筆・編集を通して、北村の明治時代以降の開発史は、北海道の開発史にもつながる普遍性をもっていると感じました。一つの地域を深掘りすることが多様な歴史観を開くとはよく言われることですが、北村はその典型ではないかと。幸いにも『開発こうほう』で3回連載の機会を頂戴したので、第1回「川といきる」、第2回「村をひらく」、第3回「農をおこす」として、北村開発史をひも解いていきたい

と思いますので、どうかお付き合いください。これは「ほっかいどう学」のコンテンツそのものになるとともに、「ほっかいどう学」の展望を考えることにもつながるのではないかと思います。



『北村の記憶』北村地域農泊推進協議会発行。
北村温泉HP (<https://kitamuraonsen.com>) で公開。

『北村の記憶』の執筆にあたって驚嘆したのは、2006(平成18)年に岩見沢市に編入された旧北村の地域史に対する意識の高さでした。2004(平成16)年発行の『北村百年史』は、1,512ページにも及ぶ大著で、生の資料の息づかいを保ちながら詳細かつ論理的に地域の歩みが記述されています。さらに、北海道史、日本史、そして世界史における北村の位置付けへの目配りが行き届き、旧北村という窓から世界が見えるのです。編入を2年後に控えた時期の発刊ということ考えると、地域への誇りと愛着を書物として残すことへの切実な思いを感じました。

また、岩見沢市北村環境改善センターには「北村の記憶」展示コーナーがあります。このコーナーでは、確かな歴史観に立脚しつつ、貴重な写真を豊富に掲げて、北村の歴史がわかりやすくまとめられています。冊子『北村の記憶』の書名は、地域で親しまれているこのコーナーの名から命名されています。

さて、冊子『北村の記憶』の最大の特徴は、北村の人々が都市からの来訪者に北村をガイドするために作られたものだけのことです。地域外の人を読み手として地域をPRするメディアは数多くありますが、『北村の記憶』はその逆。都市と農村の



『北村百年史』は1,512ページ、重さ約5kgの大著。スマホと比べると大きさがよくわかる。

交流を目指す農泊事業において、「来訪者から『なんにもないところ』と言われてしまった」「来訪者に地域の特徴をわかりやすくガイドしたい」という北村住民の声があるなか、地域が持つ、“唯一無二のかけがえのなさ”を、歴史文化の観点から伝えたいという思いが出発点となっています。A5判、本文48ページの極めてコンパクトな体裁ながら、歴史的な絵図、写真、北海道開発局札幌開発建設部岩見沢河川事務所のご提供によるドローン空撮画像などから過去・現在・未来が展望できる構成です。

松浦武四郎が3回も宿営

では、北村の歴史をたどっていきましょう。北村には先史時代の遺跡が8カ所あり、出土した最も古い土器は縄文時代中期後半（今から約5,000年前）のものと位置付けられています。遺跡の多くは、石狩川やその支流の川岸に形成された自然堤防の上に立地しています。自然堤防とは、洪水時に川から水と一緒にあふれ出た土砂が何度も川に堆積してできた地形で、周囲と比べて高くなっているため洪水時も比較的安全である上、肥沃な土壌であることが特徴です。北海道に生息しないイノシシの骨やサハリン産の琥珀も検出されていることから、集落間に石狩川を介した物流ネットワークの存在さえもうかがえます。遺跡は、縄文人が、川の作った自然堤防を暮らしの場として選び、利用していたことを教えてください。

さらに、北海道の先住民族であるアイヌにとって、主要な食料であるサケが入手しやすい川の沿岸は重要な場所でした。石狩川には、河口から樺戸地方まで石

狩13場所と呼ばれる漁場が設定されていたほど、漁業資源に恵まれていました。北村の地名にはアイヌ語地名があり、なかでも「ポロ」（大きい）、「ヌタブ」（川の彎曲内の土地）は、幌達布、大達布、袋達布などとして残っています。これはまさに地形の要点をとらえた言葉で、地名から、蛇行・彎曲する大河、石狩川の太古の姿が蘇ってきます。



蝦夷地内陸部を踏査し、『東西蝦夷山川地理取調図』をまとめた松浦武四郎。同図には約9,800ものアイヌ語地名が収録され、後の北海道の地名のもととなった。松浦武四郎記念館所蔵。

江戸時代末期、6回にわたって蝦夷地を踏査した松浦武四郎は、後に明治政府へ提案した「北加伊道」によって「北海道の名付け親」と呼ばれていることはあまりにも有名です。しかし、その武四郎が北村のニイルルマナイで3回も宿営したことは、意外と知られていません。ニイルルマナイは、近くに舟が入れる良い港があり、また、石狩川河口からの探査の行程において、宿営するのにちょうど良い地点だったようです。武四郎が同じ場所を3回も宿泊地としたのは、蝦夷地広しといえどもニイルルマナイだけ。北村は、武四郎を案内したアイヌにとって、ベースキャンプのような重要な場所だったことがわかります。

内陸開発の要路となった石狩川

そんな豊かな地ですが、「北海道地形図」（1896年、明治29年）では石狩平野の殖民区画を示す碁盤の目からはずされ、北村のエリアは真っ白。北村は、全面積の77%もが泥炭地のため農業の不適地とされて、明治時代初期の殖民区画の対象にならなかったのです。そこが今や、日本屈指の穀倉地帯であり、ICTを駆使したスマート農業の先進地ともなっています。その過程には、泥炭地を土地改良し、灌漑システムを構築し、



アイヌの人々に案内と漕ぎ手を任せて石狩川を行く武四郎。『丁巳石狩日誌』より。札幌市中央図書館所蔵。



「北海道地形図」(1896年)の北村の部分は空白である。これは開墾適地に行われた殖民区画の対象外だったことを示している。

水田を近代化してきた先人の奮闘がありました。それについては第2回、第3回で述べたいと思いますが、この「北海道地形図」に描かれた「なんにもない」土地は、あくまでも農耕を基準としてのこと。先史時代やアイヌ民族の歴史を振り返ることで、別の物差しで見ることの大切さも理解できます。

さて、北海道の近代的な開発の端緒となったのが集治監(刑務所)です。北海道初の集治監「樺戸集治監」が北村の対岸の現・月形町に設置されました。集治監は、明治時代初期、身分を失った旧士族などの政治犯、特に西南戦争後の受刑者の急増に対応したもので、政府は、彼らを北海道に移して、開墾や鉱山の労働力として使うことにしたのです。当時の北海道に道路はほとんどなく鉄道も敷かれていません。適地の調査にあたった月形潔は、樺戸郡須倍都太を選びました。なぜ海岸線でなく、不便な内陸だったのでしょうか。それは、集治監を内陸に設置することで、囚人の労働力を困難な内陸開発の原動力にできると考えられたからです。しかも集治監の建設資材運搬には石狩川が使えます。樺戸集治監の囚人労働は将来の本格的な舟運のために石狩川の水路整備をすることから始まりました。2カ月にわたって連日80名が動員され、船の転覆の原因となる水中の流木を除去したり、暗礁の場所に四斗樽を浮かべたりして船が安全に航行できるようにしまし

た。樺戸と、樺戸に続いてできた空知、網走の監獄の囚人労働によって北海道を貫く中央道路も建設されます。過酷な労働、劣悪な医療・衛生条件によって数カ月で200人以上の死者が出ましたが、囚人使役の基本にあったのは「生命の危険を考慮せず重労働に使える。死亡しても監獄費の節約になる」(金子堅太郎)という、現代では考えられない非人間的な思想でした。開拓の最前線となった屯田兵の兵屋も、実は囚人が多くを建設しています。開拓よりさらに前に地にらしをしたのが囚人労働であることも、石狩川を軸とした歴史から知ることができます。

さて、こうして整えられた石狩川は、内陸への交通路として隆盛の時代を迎えます。石狩川は勾配が緩く、水深もあり、かなりの大型船が航行できる好条件を備えていました。1884(明治17)年、石狩-樺戸間に就航した外輪船は、船体中央部の両側にある水車を回して航行するものです。底が浅く平らになっているため、河底に重なる流木などによってスクリューが損傷することも少ないのです。石狩川をハイカラな外輪船がゆうゆうと進む、そんな情景が明治時代の北村では日常の風景でした。

1902(明治35)年時点の北村の寄港地は、幌向、美唄達布、美唄、狐森の4カ所。美唄達布と狐森間はわずか5里の間に3つも設置されています。これほど互いの距離が近いのは、北村のエリアだけでした。やがて道路や鉄道の整備に伴って、舟運は衰退し1935(昭和10)年に全航路が廃止となりました。



「石狩川の白鳥」と称された白亜の外輪船、上川丸。漫画「ゴールデンカムイ」にも登場。江別市教育委員会郷土資料館所蔵。

捷水路と北村遊水地

内陸への交通の大動脈となった石狩川ですが、しばしば牙をむきました。特に北村の付近では蛇行しながら流れるため水があふれやすく、北村は水害に苦しみ続けてきました。

1898（明治31）年9月の豪雨による氾濫では、石狩川全流域で死者112名、浸水した田畑は約4万1,000町歩、被災家屋約1万9,000戸という、現在に至るまでで最も悲惨な被害が出ました。10月、北海道治水調査会が設置され、道庁技師の廣井勇（後の東京帝国大学教授）、その教え子の岡崎文吉、田辺朔郎（琵琶湖疎水の担当者。後の京都帝国大学教授）らが名を連ね、6年間の予定で河川の測量、流量、氾濫面積など科学的な調査が始まりました。

しかし、調査完了までとても待てない北村の農民は、沿岸約12kmを自費で築堤しました。すると対岸の新篠津で被害が悪化し、新篠津は北村より高い堤防を約22kmにわたり築きます。すると今度は翌春の融雪洪水で北村に浸水被害が出たため、若者数十名が新篠津へ船で乗り込んで堤防を破壊。こうした対立に北海道庁は、兩岸の堤防を違法として取り壊し命令を出しました。この事件は、流域住民にとって治水こそが生きる基盤であることを語っています。

1909（明治42）年、岡崎文吉が10年間に及ぶ調査結果を「石狩川治水計画調査報文」にまとめました。その方針は、従来の河道を生かし、溢れた川水を新たに設ける「放水路」に流すというもの。岡崎は欧米の河川改修を調査した結果、舟運を保つためにも放水路がいいと考えました。しかし、「放水路」方式では在来水路と放水路の両方に堤防が必要で経費負担が大きいことから、「捷水路」方式に変更されます。「捷水路」とは、屈曲部に新水路を掘削して直線的な流れにすることで川水を速やかに海に流すものです。

北村関係の捷水路工事は豊ヶ丘、下達布、砂浜、巴農場、宍栗、幌達布、川上、枯木、上新篠津、狐森、大曲の11カ所。石狩川全体の捷水路工事による短絡は



石狩川のおもな捷水路。「ほっかいどう学新聞」第4号掲載。元画像は国土交通省北海道開発局所蔵。

58kmで、うち北村の11カ所で計15.1kmもショートカットされましたから、北村における工事が大きな比率を占めていることがわかります。

捷水路は川の流れを速くし水位を下げ、周囲の地下水位も低下させました。すると泥炭地の乾燥化が進みました。このことが後年、空知が大穀倉地帯になる礎ともなったのでした。

時は流れ、21世紀の今、北村では北村遊水地を造成する大工事が行われています。広さ950haという、道内最大の遊水地です。その使命は、洪水時、石狩川の水を最大4,200万m³貯水することで流域を守ること。河道整備や支川の洪水調節施設と合わせて、遊水地を整備することで、戦後最大規模の昭和56年8月の洪水流量となっても流域の安全が保てることを目標にしています。捷水路は構造物ではないし、遊水地は洪水時に機能を発揮するものなので、ダムのように形や働きが一目瞭然ではありません。しかし目に見えないインフラが広大な流域の人命と財産を守っているのです。そんな気づきも、北村を通して得ることができます。

今回は、「村をひらく」と題して、開拓のリーダー、北村雄治ら北村3兄弟のイノベーションについてご紹介します。ところで、道内には開拓功労者の名が自治体名になったところはいくつかあり、伊達邦成→伊達市、月形潔→月形町、仁木竹吉→仁木町、京極高德→京極町という命名の法則にしたがうと、北村雄治を村名の由来とする北村は「北村村」になるはずなのになぜ「北村」なのか。その答えも合わせてご期待ください。